

「安心安全な米作りの実践」という題目で、私の米作りをお話しさせて頂く訳ですが、最初に考えたのは、誰にとって安心安全な米作りなのかと言うことでした。近江商人の商売の心得に「三方よし」と言うのがあります。売り手によし・買い手によし・世間によしと言うのが「三方よし」なのですが、米を作る農家によし・買って食べて頂く消費者によし・そして米を作る環境によしと言うのが、安心安全な米作りと言えるかと思っています。

何故そこまで拘って米を作っているのか、初めにお話ししておきます。私は学生時代、下半身不随で半年間、寝たり起きたりの生活を余儀なくされた事があります。当時は原因が分からず勿論治療法も無くて、今でも指定難病と言われるギランバレー症候群と分かったのは、十数年後の事でした。当時小児マヒが流行し、ソビエトからワクチンが輸入されたり、森永ヒ素ミルク事件があったりで衝撃を受けました。やせ衰えていく我が子に、せめてミルクだけはと与えたそのミルクが原因だった、そんな事件がどうしても忘れられなくて、今でもその会社の製品は口にしません。これが1番目の理由です。卒業後会社には就職せずに田舎に帰り就農しましたが、秋にウンカが発生したとき、ホースの先を持ってくれる母親に向かって、動力散布機で農薬を散布する事になるのを知って、こんな百姓やってられるかと思ったのが2番目の理由です。

つまり農薬は、使っている農家自身に被害を及ぼす可能性が有ると言うことです。田植えが始まると、強烈な臭いを発する除草剤を使う農家があります。もういい加減に使用禁止になれば良いのにと考えていますが、畦道を通っても臭うと言うことは、何らかの成分が飛散している訳で、この農薬のお陰でドジョウや小魚が死に、魚やカエルを食べた白鷺が死に、ろくな事はありません。昔、この農薬を手回しの散粒機で1町歩の田に撒いて、1週間下痢が止まらなかったという農家も有りました。ヒエ剤として他に代替え品が無いと言われて流通していますが、この剤より良く効くヒエ剤は他に有ります。なのに出回っていますね。

この様に話すと、私が農薬を使わないで米を作って居る様に思われるかも知れませんが、そうではありません。色々試して来ましたが、今では除草剤を1度使う他は殆ど何もしないで、米を作っています。従って「無農薬・有機栽培」と言うわけでは無いのです。「減農薬栽培」でもありません。それどころか逆に、人間では医療費の高騰が問題になっていて、薬漬けと言われるほどサプリメントや医薬品は大量に飲んでいながら、同じ薬品であるのに農薬という悪い物で有るかの様に言われる理由が、私には理解でき無いのです。

2年前、東京ファーマーズマーケットと言う催しに、銀座三越デパートで米を出品した事があります。お客さんが平然と「これ無農薬栽培？」と聞かれるのには正直言って驚きました。無農薬栽培でないダメ。そもそも人間が口にする物に、農薬を掛けるなんて何を考えているとばかりな言い方に、怖さを感じています。もし農薬がそれ程悪いものなら、そもそも使用許可が出るわけは有りませんね。国が安全審査をし、使っても良いと許可をした農薬を使うことが、なぜいけないのでしょうか。私は健康には人一倍気を使っていますが、それでもたまには風邪くらい引きます。軽ければ徹底的にウガイをして直しますが、運悪く酷くなれば薬のやっかいになります。

有機栽培にも同じ事を感じています。無化学肥料栽培と書かれていると、それがあたかも価値が高いかの様に思う人がいるのも、不思議な気がしています。化学肥料ってそれ程悪い物なのですか。「減農薬栽培」も私には当てはまりません。減農薬と言う言葉は、必要な農薬さえも使わないで我慢すると言う様に聞こえるのです。私の場合は、稲を丈夫に育てる事により、結果的に農薬を余り使わなくても良い作り方になったと言う方が当たっているかと思います。勿論有機質肥料も使います。これは有機栽培をするために使っているのではなく、色々試した結果その方が稲が丈夫に育ち、しかも米が美味しいからというそんな理由からなのですが。

年々温暖化が進む高温多湿な日本で、そもそも無農薬栽培は無理だと思っています。これは夏でもそれ程高温にならず湿度も低いヨーロッパの、スーツにネクタイというファッションが、そもそも亜熱帯に近いアジアの日本には合わないのと同じでしょう。学校を卒業し家に帰って直ぐに、農学部で身につけた知識では百姓は出来ないと思い知らされ、次の年に派米農業研修生として渡米しました。アメリカ・ワシントン州のリンゴ農家に3ヶ月、野菜農家には1年半住み込んで研修を受けました。実はその時に、アメリカの農家は殆ど農薬を使わないで野菜を作っていることを知りました。私の記憶している限りでは、畑でレタスの手入れをしているときに青虫を見つけ、農場主に話すとスプレーしたことが1年半にたった1度あっただけです。例えば畑にチョウチョウが飛んでくると、農場主が

大まじめに帽子を取って、そのチョウチョウを追いかけていたものです。雑草も生えないのです。畑の中で草取りをしたことも殆ど有りませんでした。わずかに春先にネギの畑で草を抜いた事がありましたが、レタスでは草むしりと言うより草拾い程度でした。まして畑や田の周りで、草刈機で最低でも月に1度は刈らなければ、草ぼうぼうになる日本とは生える草の量が歴然と違うのです。

例えば、湿度が低いのでシャツの襟が汚れないのです。靴下もそうでした。気候が決定的に違うので、アメリカやヨーロッパではそれ程難しくない無農薬栽培も、日本では大変なのです。有機栽培は分かります。しかし有機栽培と言える為には無農薬でなければならないという規定も、私には理解できないのです。秋田県大潟村の後輩は15町歩の有機栽培で、草取りの手間賃が200万円を越えると言います。それだけの米価が保証されるのなら良いのですが。そういう意味では安心安全な米作りと言うのは、再生産可能な価格で米が販売出来ると言う事も、農家に取っては非常に大事な条件なのです。

一方米を買う消費者の方に取っての安心安全とは、米の品質と価格は勿論の事ですが、安定的に購入出来る事も大事でしょう。平成5年の大冷害で米不足になった年でも、私がお送りしているお得意先には値段も数量も変わらず、同じようにお届けしました。私自身が余り不作しなかった事もありますが、世間的には米不足でパニックでした。しかし私がお送りしている方々は、米が買えないと言う話題に付き合っって話を合わすのが大変やつたんやでと、笑っておられました。「世間よし」には琵琶湖の水質保全を主眼に取り組んでいる、「環境こだわり栽培」などがこれに当たるかと思えます。

私の稲作のポイントは、6月になってから丈夫な苗を細く粗く植えて風通し良くし、太陽光線一杯浴びて育てて、登熟の良い米を作る事でしょうか。と言っても、決して特殊な事をしていると言う認識は有りません。極当たり前の事を、自然と天候に逆らわずにやっていると言った方が良いかもしれません。話だけではとても私の稲作は理解して頂けないと思いますので、スライドを準備しました。

3.これが近くの山の上から撮った、私の家の周りの風景です。

4.「耕土培養資材の散布」耕土培養資材には、ケイフンに90種類の微生物を培養した物を使います。粉状品でライムソーでは撒きにくいので、粒状の別の培養資材と混合して散布しています。

5.「秋起こし」秋起こしにはパワーディスクを使います。春になって畦塗りをしますので、周りはロータリーで軽く起こしてあります。

6.「塩水選」塩水選は病気や念実の悪い種を取り除くために必須です。沈んだ物を網袋に移すとき、こんな道具を使っています。底を切り取った8号のバケツがはめ込んであります。

7.「畦塗り」畦塗りは、ネズミやヘビ・カエルなどの穴を防ぎ、畦を高くして水を張り易くし、除草剤が効きやすくするために欠かせません。

8.「播種」播種機は、私が中腰にならずに仕事出来る高さの台車に乗せています。一人で仕事をするのを前提に、どうすれば早く楽に仕事出来るか工夫しています。育苗土のホッパーは、既製品だとせいぜい40kg程度しか入りませんので、大型のホッパーを付けています。これだと10倍以上の土が入りますので、かなりの間土を補給しなくても大丈夫。空の苗箱を3~4枚積んでおいて、次々に流れる様にもしてあります。

9.「苗代」播種量は60~70gです。昔は40gで蒔いていましたが、現在使っている播種機ではこれが限界なのです。本当に稔実の良い種を選んで、もっと薄蒔きしたいのですが。

10.「薄蒔きの苗」薄蒔きをすると、田植え時には既に分蘖が始まっています。

11.「苗」昨年からは管理と苗運びの便の為に、苗床1本ごとに畦を作って仕切っています。

12.「田植えの準備」秋起こしで畝になっている田を、春先にドライブハローで崩します。田植えの準備の為に、代掻き前に再度ドライブハローで細土しています。こうすると草が減って代掻きが非情に楽になります。

13.「水口」75mmのSUパイプで、こんな水口を作っています。二重構造で背割りした外側のパイプを引き上げると水が入ります。押し下げると水はぴたっと止まって漏れません。除草剤を一発で効かせるのにも大事な仕掛けです。

14.「田植え-1」私が田植えを始める6月上旬には、周りの稲は既に大きく生長しています。休耕するのかと何度尋ねられた事がありません。

15. 「田植え-2」私に田植機は相当古いクランク式ですが、ロータリーマーカを装備しています。田植機はヤンマーですが、このマーカはクボタの田植機に使っていたものを移植しました。クボタの時も部品だけ買って来て取り付けたのですが、このロータリーマーカだと田面に水が有ってもラインが良く分かるのです。びわ湖の水質を悪化させないために、滋賀県では田植え時に泥水が落とせませんので、非情に重宝しています。
16. 「田植え体験」こんなことも時にはやります。
17. 「魚つかみ」近くの幼稚園児が魚つかみに来ます。私の田の側の川だけがコンクリート水路になっていないのです。お陰で小魚だけでなくホタルも飛び交います。
18. 「稲の生育」植わった時には頼りない感じですが、1月余りで見違える程生長します。6月に田植えをすると、猛烈な早さで大きくなります。
19. 「出穂」早く植えたコシヒカリは8月15日頃から出穂が始まります。遅い物は8月下旬ですが、これで真夏の猛暑の下で登熟するのを、少しは避けられるかと思っています。
20. 「稲刈り-1」生育期間が短いので、どうしても茎数不足になりますが、穂はかなり大きくなりますので、収量はそれ程大きく落とすことは有りません。
21. 「稲刈り-2」左側は何度も台風直撃された年のコシヒカリです。
22. 「稲刈り-3」左は滋賀羽二重です。粳品種とはコンバインを変えています。コンバインには袋の代わりにグレンバッグを入れています。これをフォークリフトで引き抜いてトラックに積み込みます。
23. 「乾燥調整」乾燥機に張り込むのにも、フォークリフトでトラックから吊り上げて、そのまま倉庫の中の乾燥機へ入れています。精米した米は真空パックして出荷しています。
24. 「山田錦」酒米の山田錦を10数年前から共同で作っていますが、一昨年から私の田でも作り始めました。我が家の山田錦はマキノ町の吉田酒造で、純米酒「かじや村」になります。

何も変わったことはやってないと言う事が、ご理解頂けたかと思えます。ただこの様な米作りをするにはかなりな度胸が必要な事は確かです。勇気栽培と書いたのはその為です。連休明けに苗代を作り始めると、田植えが済んで苗代を仕舞っているんや無くて、これから苗代を作るんかいな？という、好奇の目で見られます。6月中旬に代掻きをしていると、減反ですか？等と言う質問が飛んで来ます。やっぱりそこそこ皆と足並みを揃えて植えてくれんと、周りの田が中干ししているのに水が漏れてきて困ると、あからさまに言われます。毎年の事なので聞き流していますが、これが日本の国民性と言われる横並び意識の原点でしょう。一斉に同じ時期に田植えをしないと田に水を引けない時代はともかく、水路が整備された現代でも、水路に水が来ないと言う事は確かに有ります。まして秋の収穫時期にはコンバインが煮え込むと嫌われますので、私の作っている田は雨水だけが頼りの稲作になってしまいます。本来、水路には常時水が流れているのが当たり前で、自分の田に水が染み込むのは水路の管理が出来て無いから漏水するのですが。最悪なのは田植え時期が周りとは違うので、道路を汚すとこれは私がやったと特定される事ですね。皆が一斉に汚す連休の頃なら、市役所から電話が掛かって来て「洗濯物が汚れるから」と言う苦情が来ている、等と言われる事は無いのですが。

米の味の決め手は何やろう？「品種？」「作り方？」「土地？」「天候？」そんな質問を受けた事があります。私の稲の写真を見て、旨そうな米やなあと思われた方は多分居られないでしょう。米はそういう物なのです。果物なら見ただけで美味しそうと分かります。しかし米の場合は一種の加工食品。炊飯と言う手順を経ないとご飯にならず、美味しいかどうか分かりにくいのです。炊飯器・水質・水加減・炊き方、色々な要素があって難しいのですが、私は米の味の決め手は米を作っている百姓の人柄やとっております。当然しなければならぬ作業をどれだけ誠実にこなすか、これが米の味の決め手だろうと思っています。ご静聴有り難う御座いました。